に永機の其角堂を襲ひ、雀志は二十一年梅年の雪中庵を繼承したのも、舊俳人の少壯分子が俳壇の中堅たるに至つた進歩的一變化であつた。これらの事どもをより詳しく叙述する前に、猶紹介しておきたい俳壇的消息を記さう。

芹舍の八十賀と泮水園句集

俳諧の正系は花の本の稱號を許された者にあるかのやうに沒批評的に信仰されてゐたので、野心ある俳諧師の一生の望みは花の本となることであつた。明治時代に早く花の本を許されたのは京都の泮水園芹舍である。芹舍は蒼虬の門人で師の追善『夏かはづ』(天保十二年刊)には卷頭を梅通に讓つて、名殘の花に押されてゐるので重視された事が解るが、花の本は梅通が九世を稱したので、その後即ち十世が芹舍になるのだけれど、この世代は全く信を措けないから、經濟雜誌社の『大日本人名辭書』所載俳家系圖の訂正を依囑された時、私は繼承の順位を變更して了つた。併しそれまでは花の本の系統を表面から疑惑を以て眺めた者がなかつたので、芹舍の花の本が保守的な俳人に崇拜されたのは云ふまでもない。

明治十八年芹舍は八十の賀を行つた。それからの芹舍は必ず八十翁を肩書に書く事を忘れなかつた程喜悅したので、門人の發企で祝賀の記念に『泮水園句集後編』が乾坤二冊その年三月に刊行された。泮水園は芹舍の別號で既に元治元年『泮水園句集』が同體裁で二冊上木されてゐたので、その後編になる譯だが、花の本句集と標題するのは流石に憚られたからでもあらうが、芹舍にそれだけ謙讓の心がなかつたのでなく、句集に泮水園の別號を用ひたのを奥床しく思はれる。題字は

靜養千年壽　　明治十八年春　　基弘

と三枚に渉つて大書されてゐるので、花の本を允許した二條家との關係が領かれよう。『泮水園句集後編』を通じて芹舍の句境を評するならば、八十翁のとても時代意識などあらう筈がなく、開化の新文明には沒交渉で花鳥諷詠の傳統趣味に耽つたあらはれに過ぎないが、

いねとてか居よとか花の散かゝる　　芹舍

平凡な感想とはいへ、表現に複雜した趣があらはれて月並調とは貶されない特色を持つて居り、

開化風俗を反映せる連句

下戸の醉ざめ

身ぶるふや火鉢の眠りさまされて

の如きも「下戸の醉ざめ」の説明ではなく、芹舍その人が「下戸は生涯の損なるべし」とある人から云はれて「雪に酒」の句も作つてゐるので、體驗の告白だとして見ればそこに現實的な迫力を覺える。又

野徑をたどりて

稻づまの下に芋の葉ゆれにけり
おとし水して飛越てもどりけり

など印象を直叙して技巧を事としない句に接すると、作家としての技倆を認識していゝかと思ふ。しかし

路傍

柳見て居たれば馬士の叱りけり
東山遊歩

花を見てたてば盃さゝれけり

これらは風流と不風流とを俳諧の境界線とした因襲的な手法で、その馬士のこゝろなさ、見知らぬ人にさへ一盃をさし向けるこゝろ床しさが、卒直に詠じられてゐるものゝそれが又嫌味なところである。

草庵對客

竹に月見よや物かげ行ほたる
壁向てあるじは寢たりどよう干

まづこんな處が芹舍のよい傾向で概して平々凡々、ひたすら風流といふ事に關心したものゝみである。自像に題した一句、

逢ふ人にうなづきもせずゆるしませ

かうした「ゆるしませ」の如き口語の嵌入でその像、その句にもの云はせる感情の純眞なものは、極めてまれにしか見當らない。

生前句集を出すことは高慢なやうに思はれるのを憚るより、それに依つて鼎の輕重をとはれはしまいかと云ふ卑怯な氣持でさし控えたものが多かつたのに、芹舍が八十の賀にその子可尙をし

て此の後編を板行させたのは、固陋な宗匠たちの中で一見識を持つてゐたと云はねばならぬ。

乞食井月の追善に開化表合

芹舎には開化的諸相が問題にされなかつたのは當然で、かれの句集を藝術的に檢討しやうとする意志も持たなかつた事だしするから、その句が時代の空氣に觸るゝところのないのを不審とも せず又失望もしなかつた。が、併し誰かゞ浸々乎として歐化して行く世相に對して、そこに時代を把握する自意識を喚起されない迄も、何とかそれを取材としそれを消化し、一卷の開化俳諧とする企圖を抱きさうなものだと云ふ感慨を持つのは私ばかりであるまい。裘れるだけの材料はさがして見たものゝ、それは全く絶望に近いので諦めてゐたところ、近來その全集さへ出た乞食井月の追善集『餘波の水くき』(明治十八年刊)に、私の待望する開化十句表が掲出してあることを知つた。これは井月の入籍した信濃國上伊那郡美篶村の鶯聲舍鹽原梅關が出版したので、呉竹園凌冬の序文を求め、井月生前の知己から寄稿した句々を輯めてある。

古里に芋を掘つて過さむより、信濃路に佛の有がたさを慕はむにはしかじと、此伊那に足をとゞめしも良廿年餘りに及ぶ。取分親しかりける人々のむかしを思ひ出して夜寒を語る友垣に換るものならし。明治十八酉の行秋

落栗の座を定めるや窪溜り　柳の家井月

卷末に附錄したこの一文は井月自筆を慕刻したので、井に似た井月の落疑などそつくりである。下島、高津兩氏編の『井月全集』には井月の文章だけ抄出してあるが、天野雨山氏の藏する『餘波の水くき』の板本にその開化表十句が出てゐる。作者の晴美、霞松は伊那の人で霞松は路傍の田甫に行倒れとなつてゐる井月を擔ぎ込まれ、さらに入籍先の梅關方へ屆けた人ださうで緣故のある譯だが、開化十句表は井月の感化によるものでなく、たま〳〵ふたりが對座して戯作的に試作したものであらう。形式は五句目に月を出し、九句目に花を詠じてゐるから、これだけで完了してゐるので、百韵―古式は表十句―の中から十句を抄錄したものでない。

開化十句表

帷子の襟に重たき時斗哉　晴美

端居すゞしき暮の蒸汽車　霞松

開化風俗を反映せる連句

砂子窓外へは聲のもれ兼て　美
同向もすめば卷たばこ吸　松
權妻もおなじ月見の客戻り　美
寫眞にうらみいへば啼蟲　松
茶の奥の祭りも國旗の音高く　同
紙幣を疊ては さむがまロ　美
建札に横文字まじる花の中　松
公使の軒に朝の黄鳥　美

發句の時斗（時計）は舶來品では年代の古いものだが、大名の愛玩した位で實用向になつたのは明治となつてからである。チョッキのさげ方を眞似て鎖を永く垂れて前につるし、まだ帶に卷くまで使用法の進歩しなかつた時代風俗の反映である。脇句の蒸汽車も錦繪に描寫されたトラック式のものであつたのが「端居すゞしき」の描寫で推察される。砂子窓は硝子張のそれに遠ひない。卷たばこを吸ふのが開化人の象徴であり、權妻といふ新造語は第二夫人の譯語で妾と呼ぶよりはスマートであつたらう。寫眞の句意は都々逸染みでゐるだけ、寫眞といふ語が同化されて變に聞えない。國旗にハタ、紙幣にサツの振假名は『三昧』でルンペンに更に「きみたち」と三重ルビを振る愚擧よりは、國語表現の新方法として賢い。横文字及び公使も新語彙である。開化表十句はかうして用語の新を求めたので、內容的に時代の空氣及び氣分を風俗的に象徴したものでないが、用語の開化的であるそれのみでも舊態依然たる作品に比すれば時代的の價値を附與されるので、有意義な企てゞあつたことを推奬しても過言とは云へまい。

連句の叙景に一脈の新鮮味

芹舍の八十の賀は『泮水園句集後編』の弄水軒序に「本年八十壽誕」とあつて「明治十八年一月於三條之樵巷」その序を記したとあるが、實際はその前年八十となつたので明治十七年の『花供養』の序詞に、

祖翁が遠忌にあひ奉るもことしふたゝびなるものから、いたづらに馬齡をかさねし甲斐もありけりといとかたじけなし。されば旅に病で夢は枯野をかけめぐる、とありし其世のさ

まも思はれ侍りて、そゞろに懐舊の情に袂をうるほす　八十翁　芹舍

花の香やけふのこゝろにしみわたる

と見えて八十翁と自署してゐるので解る。これは芹舍一門の芭蕉翁遺吟の脇起し連句をあつめた集冊で、その中で連梅の獨吟百韻は歌仙さへ持てあまして、連句はたゞ制式を知つてゐればいゝ位に思はれたその頃として、作の可否を評するよりは努力のほどを買つてやらねばならない。名殘の裏を引く。

夏よしと思ふやうなる家の向　連梅
ふいと飛び來る螢一疋
大聲で呼ばば集る道普請
ぬき捨たまゝ笠をわすれる
雛の餅かさねてあるもうつくしき
いとゞ日長におもふ靜さ
ぬかつけば花の匂ひの身に餘り
廣うながれてぬるむ山水

どこかに障りはないか、嫌ふべき言葉はないかといふ風の去嫌の吟味ばかりして、作品を第二に置いたのだから無感激の句をならべたものに過ぎないが、匂の花に花供養を栞つてをり、擧句がやゝその體をなしてゐる點に芹舍門の一作家と許された連梅の力が量られる。

芹舍の八十翁と記した例は『やまかつら』の序にも、

越中の國入膳の鄕なる四郎子はとし頃俳諧を好む事、彼國の雪よりも猶深かりけるが、さらに我門に入て日々夜々に練磨をつまんと名を改て立山といふ。こはゆく〳〵志しをその山にもくらべんとなるべし。こたび改名の一冊子をものして諸君に贈る。かゝればます〳〵其名の高く聞えん事うたがひあるべからずと、事ふれがてらはじめに筆をとる。

明治十七年四月　八十翁　芹舍

かう明記してゐる。明治十七年が八十であつて芹舍が明治二十三年一月享年八十六で歿したその享年に一致する譯である。芹舍の作ではないがこの『やまかつら』にも門人たちの歌仙があるので、花の本系の連句を評價しがてらその一部を抄出しよう。

草ふかし夜さへ暮れば露の置　竹母
追々あとにつゞく鴈がね　立山
月の秋旅荷手輕く拵らへて　連梅
茶を煮る度に明る窓の戸　母
はら〳〵と木の葉時雨る音ばかり　山
普請殘りの石の三ツ四ツ　梅

歌仙の表は禁制的約束でしばられてゐるので、眞の技倆は裏移りからでないと現れないといふが、その約束に支配された表を見れば一卷の運びがあらかじめ推知される。この表には月を第三に引上げてゐるのはいゝが、旅體は表に制止される慣例によらないで「旅荷手輕く拵へて」と、あきらかに旅體を出してゐる。冬を一句で詠み捨てゝある。夏と冬とは一句でも構はない事になつてゐるが、表にはあまり見掛けない。かうした制式上から二三咎立をされるであらう作り方を見ると、芹舍はそれらの事に拘泥しなかつたらしくも思はれる。さうして連梅の獨吟よりはこの表の方が叙景的に巧みな推移をはかつてゐるので、或は偶然であるかも知れないけれど、制式に囚はれなかつた事それが內容的にいく分の優越性をもつ點となつたのであらう。芹舍の句評を概叙したついでにその門人の連句に就いて一顧して見たが、大して變つた事もなければ時代の影響も見られなかつた。

義仲寺で七日七夜の大法要

其角が義仲寺を呪つた手紙

俳壇的に華々しく聞えて然もあく抜けのした澁い風流味を思はせる永機の芭蕉翁法會が、明治二十年十一月二十日から七日七夜の間近江の義仲寺で執行された。義仲寺は寺とはいふものゝ義仲塚の所在でその塚守の堂があつたので、一個の寺格を備へたものでなかつたから、こゝの無名庵に寓居した時分の芭蕉翁も所附には木曾塚と書いてゐた。それが四邊の風景を好む遺言によつて、元祿七年十月十二日の夜舟で蕉翁のなきがらを大阪から運んで來て、十四日夜その「木曾塚の右にならべて」（枯尾花ニヨル）埋葬してから、蕉門のともがらの間に大切な菩提所として扱はれたが、其角が有名な『枯尾花』（元祿八年刊）を選んで以來どうした理由からか、江戸から出向いて義仲寺で追善を行ふことは絶えた。その事情を疑はせるやうな其角から、丈草宛の手紙を永機が『明治枯尾花』（明治二十六年刊）に發表してゐる。

膳所の人々相かまへて化され玉ふな〳〵。里東丈、野徑丈へ申上候。翁は行脚飢死とたてたる本誹賊どもかやうの見へすいたる工みをいたし恥を忘て文通いたし人に見せ申候もいま〳〵心にて候。此者ども大盗人にて候、江戸中此手はくはんの木にて候。無名庵ありてもはゝ木々のしく獨寒灯にむかひ二通共見ずに封のまゝ其元え還候。かやうのわけにては義仲寺が□□卷にてありとはいへとの心芭蕉翁の本意にかなひ申事にて、義仲寺いよ〳〵がてんまいらぬよ。□やら□□が義仲寺やらとかく翁の名を寶喰と相見へ候。天地の怒を吐大地震大火人々心胸をやすんぜず。是邵康節の二萬九千六百年の天地の一呼吸とある半呼と存候而佛神に私なく少しも謀計の志なく、上一人より下我等まで正道を守申候折からに、かゝるてれんを申金銀を奪候上は義仲寺も寺ならず、翁も翁ならず人口に朽可レ申事に存候間狐狸ども御せんさく被レ成候而、江戸に長三郎あらんかぎりは似せもの合點いたさぬわけ御制禁可レ被レ成候□□からして狐狸のやからに存候。

丈　艸　様　　其　角

右手紙の六號活字で割書的に挿入したのはなほ〳〵書であつて、里東、野徑はいふまでもなく

膳所蕉門の二作者であるが、枠の中に圍つてある人名は永機が『元祿俳士の名顯さんも追善ならず、よりてのぞき侍る也。見る人あやしむ事なかれ」と缺字の理由を附記してゐるが、「あやしむ事なかれ」どころでなくその除かれた人名の誰々であるかゞ、奇怪な行動を其角から指彈された人物であるので不審とせねばならない。但し文中の「江戸に長三郎あらんかぎり」とある長三郎は俳人でなく、自分より何倍も大きな圖體をした馬を衆人の前で呑込んで見せるので評判な手品師鹽屋長三郎の事である。一體義仲寺には直愚といふ上人がゐて蕉翁の引導を渡したことも『枯尾花に見えるが、どうも此手紙は寺方の所爲を不快として書いたのと思はれ、末行の［　　］からして狐狸のやからに存候――とあるのを誰かそれらしい？の人物にあて嵌めると、さしあたり疑惑は路通に向けられよう。『枯尾花』の法要に其角が文臺を跳上つて押寄せた路通を叱つて追拂つた俗說はともかく、路通が蕉翁の二七日に行つた「追善各集ニ粟津義仲寺一」とある世吉の一順には丈草が見えず、膳所の作者中に里東や野徑の名がない上、その詞書に「請ニ直愚上人一設レ齋」とつゞけてあるので、上人直愚が路通の語らふ處となつて何か蕉翁を冒瀆した行ひがあつたのでないかといふ文意に推讀される。路通が大津の乙州の助力で『枯尾花』のそれとは別に追善を行つた俳諧は彼の著『芭蕉翁行狀記』元祿八年刊に載つてゐる。或は支考でないかと疑はれるがその『歸花』元祿十三年刊には其角こそ見えないが、丈草は出座して卷頭の發句を詠んで居り、膳所から野徑も出向いてゐるので、其角の手紙は『歸花』の義仲寺千句を目標としたのでないのが解る。『枯尾花』の後江戸から義仲寺へ行つて法會を催したとすれば『粟津が原』の桃隣位であらう。江戸蕉門は遠く隔つてゐる關係もあつて、深川の長慶寺で年忌々々の法要を營んでゐたので、其角の手紙が何か深い譯あるらしく考へられるのである。

其角堂の嗣號代は金三百圓

さうした次第でとは云へ、其角の手紙に暗示される義仲寺への不快が第一原因であつたといふ譯ではないが、元祿の『枯尾花』から後ほ殆んど江戸俳人で義仲寺法要を行つた者が打絕えて來たので、永機はそれを再興する自負心もあつて此法要を營んだのである事は、後にその時の俳諧を『枯尾花』の標題で板行した點から領けるであらう。だが永機をして遂にその思ひ立ちを實踐明治させたのは向島の其角堂を門人の巽離庵機一に讓渡し、別に阿心庵と號する事となつたからで、

その時機一は其角堂八世の嗣號代金三百圓を永機へ支拂つた。すると永機はあつさりしたもので「これはお前からもらつたのだから無いものにしてみんな使つてしまはうよ」と語つたさうで、私は機一氏から直接聞いたのだから嗣號代も永機の言葉も間違ひない筈だ。尤も永機はすぐ義仲寺へ向けて出立したのでなく、機一に其角堂を讓つたその明治二十年五月十五日芝の紅葉館で

待〳〵て咲や三國の遲櫻　桃齋
月なき春を惜しき武藏野　永機
早蕨に藥の鯛を切込て　等栽
掃除の濟だ閒の廣う成　梅市
夕暮と暮るゝ境の凉風に　機一
蟲くふ鳥の喰も盡せぬ　蒐好

と送別の一席が催され、同月二十二日附で『やまと新聞』に次の書信が掲出されてある。柳涯の手記から孫引きを許してもらうと、

二十年の草庵を破りて遠く修行に出る日

菴の夜の今日限りに猶明安し

昨二十一日草庵を立退申候。明廿三日午後より磯部溫泉迄出、車にたのみ候つもりに御座候。去十八日梅幸いとま乞に來り物語のうちに

蛛の巣を手で拭く庭のすゞみ哉　梅幸
石伏魚十ヶ計活す馬たらひ　永機

其角堂を遺り阿心庵と致候。御心得被ㇾ下候。餘は後便に讓候。可祝

五月二十二日　阿心庵永機

これで二十一日向島其角堂の新舊堂守が入換つたこと及び阿心庵改號がそれと同時であることが知れる。文面の梅幸は五代目菊五郎でありそんな時の挨拶にも附合を忘れなかつた心のおちつきが見られる。五月三十一日の『やまと新聞』には旅中の第一信が掲げられ、二十六日川越の松濤庵で新築の茶席に「おきよ〳〵我友にせんぬる胡蝶、翁」の畫讃を床掛けとして茶の湯俳諧が催された事などあつて、

午後より入閒川鮎狩に候。大漁。入閒川を汲入て風呂を建たり。今日の句

竹生島の謠ひに緣樹沈んでと有

水影や鮎のぼる樹は鵜の塒　永機

釣して網せず

のぼる間を待て入間の蚊針哉　蕉好

あるじの句未だ聞えず、もはや野坊磯部へ參り候哉に貴地一二の新聞に出で居候得共實は前の如く途中に遊居候。呵々

五月二十七日　阿心庵永機

此旅信に「一二の新聞に出で居候得共」とあるので永機の行動がニュースに取扱はれ、當時として大新聞の『やまと新聞』がそれからも隨時永機の旅信を載せてゐるのから見ると、地方へ行つてやつと土地の新聞のニュースとなる現代俳人は全く顏色なしである。永機は同庵のとら女をつれて北越筋を十月どろまで遊び廻つてゐた。同庵とは俳諧師の妻女をさう呼び慣はしてきたのであるが、とら女は吉原で藝名を「おとら」と呼んで仲の町で鳴らした女性であるが、永機は中年からそのいゝ人で晩になると蕉好と梧風の二弟子に酒をあてがつて留守をさせ、お鐵漿溝の近くで自前の家を持つてゐた「おとら」のもとへ出掛け、そこにはちやんと卷や點式などが備へてあつて、「おとら」がおざしきを稼いでゐるうちは書き物や點を引いたり、今でいふ愛の巢をかまへてゐたが、遂におとらは藝者をやめて永機の妻となつたのださうで、永機よりおくれて大正八年八十三で歿したやうにこれも機一氏から聞いてゐる。蕉好もずつと執事格で同行したと見えて『やまと新聞』の旅信に出づる俳諧の中にその名が現はれて來る。『明治枯尾花』にも

五月かけてけふを重荷や時雨簑　蕉好

と五ケ月に渉つての旅行を思はせる獻吟があるのでどこまでも隨行したものであらう。

やまと新聞の前觸れと永機

永機の義仲寺法要は東京の諸新聞に前觸れが出てから世間的にセンセイションを起したが、『明治枯尾花』には梅逸の跋に「明治枯尾花は七年以前吾師永機翁於義仲寺に七日七夜の法會執行有し日記也」とあつて、蕉翁の年忌を營む爲めであつた事は一個所も記してない。が、世間向には芭蕉翁二百回取越しの法要と觸れ廻したのらしい。實際は『明治枯尾花』の出板された明治二十六年

が芭蕉二百回忌に相當するのだが、その取越しといふ方がニュースとして大きく取扱へるからでもあつたらう。十一月十二日の『やまと新聞』には

豫て噂ありし如く本月二十日より二十六日迄七日間、粟津義仲寺に於て翁の二百回忌大法會を營まるゝ由にて、雪中庵梅年翁は來る十八日に海路を出立、太白堂吳仙翁は廿日に是も船路を出立され、大津にて永機翁に出會なし法莚に連るの都合なり。

と報道されてゐる。永機はその二十日が陰暦の十月六日で、それから七日目の二十六日が同じく十月十二日の正當忌日になるので法要には舊暦を採用した譯である。陰暦十月六日の第一日法要は法明院敬德阿闍梨を導師として永機先づ

なき魂の御出あるは年に五たびとねはん經に見えたり。

けふはそのためしを捨て

枯蓮やこゝに淨土の道しるべ　永機

と吟じ大阪から來た八千房の先代流美その他十人出座獻吟した。翌七日には

此日東京よりはせつけたるもの三人

わすれずに降はむかしの時雨哉　機一

尾花かれぬふたもゝとせの根を締て　磊山

二百年降もふるさぬしぐれ哉　松塢

と永機の日記に見える磊山は雷柱庵、松塢は皓々舍で共にその門人であつた。

ぬれ殘る月影見たりはつ時雨　古雪中梅年

この句を獻じた梅年も三人と同行したので、機一氏の話によると、

横濱まで汽車で行つてそこで汽船に乘り四日市へ着いてから、徒歩で鈴鹿峠を越えて大津に向ひましたが、草鞋がけで迚も疲れたので人力車に乘らうではないかと弱つた者もありましたけれど、梅年さんは「そんなことは無駄だからよさうよ。お金ばかりがむだでない。もし俥屋にえらく吹きかけられでもしたら、いゝ恥ざらしになるからの」と聞入れないので、とう〳〵疲れた足を引いて草津の姥が餅で晝飯をつかひ、瀨田の橋を渡つて義仲寺に入つたやうな次第でした。永機老人は俥に乘らなかつたことを「はせを樣もその心掛けを喜ばれるだらうよ」とほめて呉れました。

梅年は木綿のさらしを買つて紺屋へ染めにやり、いつも鼠木綿のきものを着通したといふ質素

な人であつたさうで、俥をむだと拒んだ話にその平常が躍如としてゐる。その日は義仲寺で永機を中心にこれら二十人ばかりの人々が集つたが、東京の其角堂でも孝節、素直、機春の居残つた者で三吟歌仙を催した。八日(陽暦十一月二十一日)には伊勢から麥堂、ほかに新顔が五人加つた。

粥ぬくし朝精進も冬の事　永機

九日は中同向で大阪のあしの丸家貞英も見え、新献吟者が十四人ふえてゐる。歌仙も催されて

凩にうしろ吹るゝ野末哉　梅年
かれし中より澄わたる水　流美
燈籠の火ぶくろは木にものふりて　永機
三方椽の四方ひろ〳〵　北叟
有明の影をしまるゝ雲一重　須叟
くたびれ足を撫るひやゝか　稲所

發句は嵐雪の「こがらしの吹行くうしろ姿かな」といふ蕉翁の同郷を詠じた句を踏へたもので連衆二十三人をかぞへるが、永機は別に

木曾殿と塚をならべてと有したはぶれも後のかたり句に成ぬ
木曾殿にわくるも寒きそば湯哉　永機

と懐舊してゐる。が、これは伊勢の又玄(いうげん)が木曾塚の蕉翁の許で一泊して作つた「木曾殿と背(せなか)あはする夜寒哉」の句を蕉翁の吟と誤傳されたのを永機は知るや知らずや、義仲寺の境内に文字はすこし出入あるが今も蕉翁の句碑に殘つてゐる句を下地に詠じたもので、今更のことながら訂誤しておかねばならぬ。十日、十一日と法要はつゞけられて行つた。

確に枯尾花再生の大法要だ

いよ〳〵芭蕉忌の十月十二日(陽暦十一月廿六日)には正式の文臺を立てゝ永機と梅年が正副宗匠、執筆は機一、菟好が交代で勤めて百韵一卷を芭蕉翁の碑前にさゝげたのであつた。

明治二十年十月十二日於義仲寺

追善之俳諧

枯て後尾花にかゝる雲もなし　永機

義仲寺で七日七夜の大法要

霜なつかしく笠をいたゞく　機一
くれ椽の杢目こまかに夜の明て　詢蕘
ぬり鞍置けば馬もよろこぶ　蕘好
みつが三ツ餅のひつゝく山折敷　磊山
霧もかざりの菊のはつ月　靜和
脱かぬる葛の袴をうち恨み　正義
かぞへて遠き秋も此ごろ　機春

二の裏の花の座は大切な場所なので、こゝへ選ばれるのを擧句の花についで名譽とされてゐたが、此百韵には

花提て通ればせまき潜り門　義仲寺現住乍昔

が擧げられゐる。乍昔は無名庵を號した芭蕉堂の堂守であつた。これに對し名殘の裏の

青天にこぼるゝ花を座に請て　梅年

と梅年が匂ひの花の句主に推されてゐる。作者は百韵一人一句づゝで「僧正の鼻もつ役も肌さむく、三升」とあるのが九代目團十郎であり、菊五郎の梅幸や三河の蓬宇、東京の金羅、大阪の八千房無腸の名なども卷中に配置されてゐる。これらの人は出席した譯でないから誰かゞ代作したものである。その日出坐した俳人で唯一の生存者である機一氏の話を再び引かう。

追善俳諧を行つた式の模樣は芭蕉翁のお墓に向つて右に芭蕉堂がありまして、その左に二十疊ばかり敷ける道場があつて眞中は石たゝみになつてゐました。そこで七日の間には俳諧の日、發句の日、源氏講などもあつて連日四五十人は缺かしませんでした。俳諧の次第は附句ができますと執筆に向ひ御前句と呼び掛けて文臺の前に進み出ます。さうして口づから附句を讀み上げると、執筆が宗匠の顏色を覗つて、よろしいと頷くを見てから治定して懷紙に認めるのでして、別に變つたこともありませんでしたが、大概朝の九時頃から始まり、百韵を卷了るのは燭し頃でありました。これは「文臺燭を取らず」といふ掟があるので、灯がついてから決して卷かない事になつてをりましたからです。

その日の式がすむと大津の魚善まで行つて泊りました。義仲寺の晝の辨當もこの魚善で賄つたのでした。

その俳席の容子がどんな風であつたかは此の話でほゞ解るであらう。永機が其角堂を讓つて機一から受取つた嗣號代三百圓は、同庵とら女と五ケ月も北國をあるき廻つてみんな費ひ果した筈であるが、行く先々で揮毫やら俳席の謝禮やらで用意の三百圓は手つかず殘つたので「お前のあの金はちつとも減らないよ。今度こゝではたいて了ふつもりだ」と機一に私語したさうだが、その費用も京阪の俳人が分擔したので、遂に永機は一金もつかはずに濟んだらしいと、これも機一氏の話である。今日の金にすればその時の三百圓は十倍にも廻るだらうが、それを惜まず費消しようとする永機の恬淡な態度、さうさせては義理がすまない、われ〳〵の顏が立たないと云つてすべてを負擔して本人に迷惑をかけなかつた門人だちの心遣ひを今の俳人が聞いたら、うらやましくも亦隔世の感慨を起さないで居れなからう。そこに大まかな時代氣分がまだ〳〵殘つてゐた譯である。

義仲寺の芭蕉堂々守は乍昔の後何代か變つて永機の百韵發句「枯て後尾花にかゝる雲もなし」は今も句碑として保存されてゐるが、永機の後にこれ程派手な法要を營んだものを聞かない。永機が元祿の『枯尾花』に對して明治の『枯尾花』を後に選んでありし日の作品を發表したのは、いくらか自讃的な行爲に見られもするが、事實に於て元祿のそれに次ぐだけの堂々たる企圖であつたので、それから四十餘年を經過した今日といへども、確に解消されない歴史的意義を持つと思ふので特に詳しく記述したのである。

附記、機一氏の話は大正八年十一月二十七日に聞いて筆記しておいたもので、私の明治俳諧史の研究に着手したのはその前年頃の事であつた。

柳營連歌師と古連歌の再建

舊幕府の傳統藝術の保護策

明治新政府は舊幕府の職制を採用しなかつたが、江戸時代には傳統藝術の保護策として諸藝道の宗家を世襲的に定め、これに封祿を與へて生活を保證した如き、現代から見て寔に範例とす可きものが舊幕政にあつた。古典劇として世界に誇る能樂も、幕府の保護に浴しなかつたら日本的に洗錬された技藝を今日鑑賞されないかも知れない。其能樂の五座は元より宮廷音樂として保存された筈の雅樂ですら、幕府で東儀、多、薗の諸家を御樂人衆として扶持して今日に傳へ得たのであつた。將棋の大橋、碁の本因坊も一定の世祿を與へられてゐた。併し幕府は大衆的に隆盛な歌舞伎や俗曲に對しては頗る消極的で、其の甚しき弊害を矯める程度に止めてゐた。あらゆる階級層に滲透した俳諧に就ても亦、これを奬勵するとか扶助するとか、積極的の政策を執らなかつた。俳諧の代りに其の母性である古連歌は室町以降、武家文學として傳統したにも拘はらず、一般大衆には全く倦厭されてゐたので、其の保護に意を致して連歌道の家元里村家には京住を許して百石廿人扶持を給し、別に瀬川、坂兩家には旗扶持十人口を以て都合五名の連歌師を置き、幕府の式日に法樂連歌を執行する用意に、江戸及び鎌倉その他の神社に於て連衆九名を指名し、その一名は執筆（シュヒツ）の役を受持つことゝなつて居た。さうして連歌師並に連衆は幕府の職錄である『武鑑』に登錄され、その知られた者は宗家として恒例の法眼に叙された里村昌桂、『連歌辨義』の著者である坂昌周、この人は淺草黑舟町に住して江戸詰であつた。連衆には淺草日輪寺の其阿、執筆には日本橋南二丁目の星合伊織がゐた。

一は維新、一は瓦解で、新舊の政府組織は一變し、舊政府の庇護したものゝ一切は天災的に特權を奪はれたが、傳統藝術に至つては殊にみじめな最期を敢てしなければならなかつた。大衆的の支持を受けない連歌師は全くちり〳〵どころか、そんな職業――連歌で生活を求むる――そんな家元――連歌師の道統に就いて關心を持つものなんぞは一人も居なくなつた。明治二十年代、國粹的な藝術傾向が建直された時代、假名垣魯文と對峙した舊戯作者系統の作家で、彼よりは趣味的に高尚であつた條野採菊が今は紙魚さへ蝕まない古連歌の再建、いや古連歌といふものが今

以て傳統されてゐるぞといふだけの紹介的な仕事を試みたのであつた。採菊は江湖新聞を創め東京日々新聞を起した操觚者で、新聞文學としての續き物に新生面を拓いたが、魯文は山城河岸の檀那と呼ばれた細木香以の大盡風な面影を、『今紀文廓花街』に描いて俳諧師と風交があつたのが實證されるが、採菊は魯文が手を着けたから俳諧を疎んじた譯でないけれど、連歌のより古い傳統、さうして埋沒した舊文學にその趣味性が餘計にはたらき掛けたのであらう。舊幕府の連歌師であつた瀬川、坂兩家の系統や、連衆であつた家柄の人々と接近して、俳諧、それは勿論蕉風の起らなかつた談林、貞門の滑稽文學化されない以前のものゝ更に一時代古い連歌の制式、用語を保存して純然たる連歌風の作り方を連歌師の傳統した通りやつて見ることを第一義としたのであつた。文學的評價をそれに求める下心があつたのではないやうだ。だから採菊とその同好者との古連歌の再建――ではないたゞほんの紹介仕事は閑文字的により〳〵席を開いたのだが、明治二十年の頃、採菊が『やまと新聞』に古連歌の共同制作を發表したので、御歌所風の歌を今もをり〳〵は新聞が揭げる位の興味を時代的に唆つたことであらう。

新聞人採菊のインテリ趣味

古典文學は祀祭及び儀禮として嚴肅な氣分を支配するので、日本最古の口誦文學である祝詞の如きもさうした効果に於て永久性を有するが、連歌はたか〳〵室町から鎌倉期にさかのぼれる位で古典的嚴肅な文學でないけれど、採菊と同好者が新嘗會に連歌を張行したのはよい思ひ附の新民間行事であつた。明治二十年十一月廿三日の新嘗會それは陰暦十一月中の卯日の新饗を以て、國民的祝祭日とした明治政府の布令に對して左の連歌を行つて慶賀した。

天津神祭る鏡か冬の月　傳平
聲面白きとりもの〻歌　照阿
九重の内もあらたに雪降て　嘉庸
山里いかに嵐吹らん　善靜
川水に浮び流れてちる櫻　了悅
霞の末を下す筏士　俵作

暮て行春の湊を旅の空　松民
今啼連て歸る鴈がね　昌浮
はる〳〵と燕わたして如月に　了仲
丹生の小家の雨のつれ〴〵　克德
いつ解て垢付衣洗はなん　昌澄
久しくなりぬ室の灯び　執筆

これは十一月廿五日附の『やまと新聞』に掲出されたものから抄錄したので、發句の作者傳平が條野氏、號は採菊の本名である。百韵式で本格的に執筆を設け十人あまりの連衆を擁してゐるので見て、眞摯に制式を違へず執行されたものであるやうだ。神祇の發句に「とりもの〻歌」即ち神樂の採物を脇句に詠入れて韻字で止め、第三は同季の「雪降て」と「て止」で承け、冬は三句、春は五句で聯てゐるのは俳諧の連句と違ひを見ないが、無季のものを間に挾んで季節の配り方を考へ、俳諧の連句ではやゝともすれば冬から春へ突然な季移りを行ふとは異つて、本式で自然な季節の推移であること、それと裏移りとなつて折立に「如月」を出したのは、俳諧には月の座の移動を許容はするが、折立に月、たとへ月次の月であつても詠むことを敢てしないのだが、連歌と俳諧との本質的な違ひはそれよりは用語の雅俗にあつた。こゝで見らるゝ通り連歌には歌言葉として慣用されるものゝ外は一切使用しない點である。俳諧では俳言として重視され、無俳言の句を極端に排斥したのとは全然反對な立場を執つてゐる。連歌では雅言を本體として俗語を制禁し、俳諧的には氣分の變化となつた無心所着の附句を許さないのである。ざつと見渡したところ、この程度の境界線を以て連歌と俳諧とは區別されるのだが、古連歌を知らない何人でもこゝに抄錄した作品を一見して、俳諧の連句でない事だけは確に判斷されるであらう。

採菊たちの古連歌を行つたのは上野の東照宮であつた。今いふ江戸趣味は庶民階級のそれに過ぎないが、舊幕府時代の生活樣式は士分以上のものに存するので、士族の稱呼で階級的の自負心を僅に支持した舊幕府の緣故者として、古連歌の會にこそ江戸趣味の眞實なあこがれが現はれる譯で、それには東照權現の社務所が適當な場所であつたであらう。俳諧の制式がそれに準據して連歌から分岐したと云はれる和漢連歌も彼らの間には隨時行はれた。その作例を擧げると、

むら竹の葉分を霜の降日哉　傳平

菊花曉　月芳　黄石
蔭寒き月は籬にかかふれて　嘉庸
軒端の山を西にこそ見れ　澄昌
都出て今日や枕を結ぶ野に　善靜
霞の衣一重かれなん　照阿
紅梅開ニク　錦繡ヲ　石丶
黄鳥奏ニス　笙簧ヲ

明治廿一年十二月十六日の作として『やまと新聞』所載のものがこれで、漢詩的の教養がないものには不可能な制作であつた。

古連歌の傳統は土岐善靜へ

明治廿二年二月十一日の憲法發布は、傳統文學として古連歌の存在を知らせる絶好の佳き日佳き時であつた。

憲法發布を祝し奉りて　善靜
民に布く憲や聖の御代の春
嬉しくかほる四方の梅が香　嘉庸
鶯の初音聞日に早成りて　傳平
心いさみつ朝いをもせず　了悅
をくれじと舍りをいづる旅ごろも　弱
都は近し陌にれはふ　昌澄
夜をかけて月の秋とや愛つらん　照阿

發句の作者は土岐氏、淺草松清町等光寺の住持で舊幕府の連歌師の家格を持つてゐた。俳諧の好みも淺からず寂羅坊湖月と號する宗匠でもあつたから、この發句は古連歌の單調な手法より出たとは見えず、俳諧の發句に近い趣向の取り方と言廻しとである。了悅の「心いさみつ朝いをもせず」が古連歌の常套的な附句の體をなしてゐるだけで、大抵は俳諧の附け方と相似てゐるのが、連歌の命脈が既に盡きつゝある事を暗示してゐる。作者の一人照阿は深川の神官で少教正に補せ

られ、採菊の寓居で「連歌に夜を更して歸りしが、車なれば杖を忘れ翌日件の杖をとりによこすとて」といふ詞書があつて、

おのが身の力と頼む杖をすら
忘るゝ迄に老にけるかな　　照阿

といふ歌を採菊に送つたので、其の返しに、

おのが身の力と頼む杖をしも
忘るゝ丈は老せざりけり　　傳平

同じく歌を以て酬ゐた採菊の逸話で、歌道から入つて連歌本位の作者となつた彼のインテリ的な趣味が親はれるでないか。

三月九日の『やまと新聞』に「憲法發布奉祝の連歌を興行しかしこき御あたりへ奉りしに、御嘉納あらせられたる旨御沙汰を蒙り、こよなく有がたき事に思ひて、興行せし連歌を左に」と採菊が悦んで筆を執つた懐紙の一部を擧げよう。

鶯も聞えあげゝり祝ひ歌　　昌澄
御池の蛙春にあふ聲　　照阿
いとゆらく玉の緒柳雨帶て　　善靜
千草百草下萠にけり　　傳平
分る野は何所の里につゞくらん　　嘉肅
暮行道ぞ月を伴ふ　　澄
露結ぶ秋の衣手しやかに　　阿
風もたえ〳〵なびく薄霧　　靜

俳諧風の調子を持つた發句及び脇句で古連歌の悠暢な氣分になりきれないのは、或はそれが當然な時代の推移と見ねばなるまい。古連歌の會席はずつと東照宮社務所でつゞけられて來たが、作者中で土岐善靜(ゼンジヤウ)が最も世間的に聞えたのは俳諧の宗匠であつたからで、寂羅坊の運座には私の父錦風居士も出席した事があるさうで、その湖月の點した卷々を父の古い本箱からさがし出したのは今から三十年も昔にならう。大槻如電はこの善靜に連歌の制式を聞き雀志に俳諧の捌きを教はつたのださうで、幸田露伴氏は如電を通じて雀志の捌きを知り、連歌に就いては善靜の說を同

じく傳聞したやうであるが、その名著『冬の日抄』その外の七部連句の註解には連歌の方の教へは見受けないので、氏が善靜と接して居たならば連歌の傳統に關して、より博識を以て後輩を感動させたであらう。歌人土岐善麿氏は善靜を父として然も連歌には一向無關心であつたので聞き知るところがなかつたやうに語られた。文法學者山田孝雄氏は連歌の家柄に人となつたさうであるが、小宮豐隆氏からたゞそれだけ又聞きしたので詳しくは知らない。古連歌再建の一項は特に研究したのでなく、柳涯の新聞から書拔いたものを材料に、俳諧東京時代の傍證的な說明に書いたまでの事で更に調べて見たいと思ふ。

松尾家は明治で亡びたのか

連歌が傳統文學から古典文學化されると共に、俳諧が連歌に代つて傳統文學となつたので、文獻的に此の時代の俳壇にもたらされたものに何があるだらうか。『俳諧年表』には明治二十年の刊本に其殘の『俳諧早合點』を擧げてゐる。其殘は岩波氏、信濃上諏訪の人で雪散屋と號したので、その著『俳諧早合點』は季寄作例の簡明な書として普及されたけれど、これは爲山の序文に慶應戊辰重陽後一日、卽ち明治元年九月とあるから二十年ばかり前に編輯されたもので、新曆法による分類は施されてゐない。初刊本と思はれるものは明治十二年の奥附があつて出板者は藤森平五郎で、明治二十年の奥附あるものは宮坂富吉を出版人として、兩本共增補の二字を添へてあるが「切字の茶話」といふ一項だけで、內容は初版、再版の異同を存じないから、假令それ以前に刊行されたものがあつたとしても全然同一の體裁のものであらう。横三ツ截の懷中するに適當な型なので運座用に流布したが、この型は其殘の新意匠ではない。其殘『の俳諧早合點』は大したものでないが、彼の著『艸の餅』（明治二十六年刊）には芭蕉研究の一資料たるものがある。芭蕉翁の松尾家定紋の事である。其殘は「祖翁松尾氏、御定紋の容あたりにしるものなく、依ゝ之先年伊賀上野舊城下戶長衆中に依賴なして正實を得る。則返答書貳通其儘こゝに上梓」と記して擧げたその一通は

松尾氏の紋所略說

巴の紋（圖ハ略ス）

定紋ノ起因略說

松尾氏ノ祖先ヲ聞クニ、平家之正統池大納言ノ世臣彌平兵衞宗淸ナル者ノ裔孫ニシテ、數

代當國柘植里ノ郷士タリ。爾后松尾、柘植、福地ノ三家ニ支流ナシタル由ニ聞ク。今マ松尾氏ノ嗣世スル者ナシ。仍テ同性ナル柘植氏ノ紋所ヲシテ模寫シ以テ呈ス。想フニ因ミアルノ柘植氏ナレバ、敢テ松尾氏ノ紋所ニ變ルナシト思惟セリ。

右御諮詢ニ依テ具申ス。

十二月二十九日　　菅野德之助㊞

戸長閣下

これに附記された一通は、

俳人松尾氏之定紋御問合被ニ相成一候ニ付、當町菅野德之助ニ諮問ニ及候處、別紙之通申出候條、該書相添及ニ御回答一候者也。

明治十五年十二月二十九日　　伊賀上野東町戸長㊞

岩波其殘殿

芭蕉翁の定紋は松尾家の正統が明治十五年代に既に伊賀上野に居住しなかつたので、遂に知れずに了つたのだから柘植氏の紋を以てこれに充てると云ふ文意である。然るに松尾家の菩堤所愛洗院の過去帳で今から三十年前伊賀阿保の龜井曉氏が調査したところに據ると、松尾家の初代は芭蕉翁の父で法諡を松白淨惠信士といふ人（明暦二年歿）で、二代は芭蕉翁の長兄半左衞門事、月峯不殘信士であるが、それから了仙、涼清、宗休、淨空、久光の五信士を經て、八代の宗道信士となるので、この人は明治二十二年五月二十七日に歿してゐるから、其殘の照會した明治十五年「松尾氏ノ嗣世スル者ナシ」といふ回答は不審とせねばならぬ。尤も龜井氏は愛洗院の過去帳を疑問として話されたから、半左衞門以後の代々の繼承者はこのまゝ信じられないにしろ、明治二十二年宗道信士の歿するまでは上野に住居したと見ねばならない。現に上野町の赤坂口には松尾半左衞門の住んだ平家建が殘つてゐるので、明治十五年早くも一家離散したものとは考へられない。其殘が定紋を知らんとして照會したればこそ、こんな問題もこゝに提出される譯である。かうした其殘の思ひ附きを見逃されんので餘事ながら記しておく。

猿蓑附合注解と指直の立場

其殘の『俳諧早合點』から話はそれて行つたが、文献的に見て一顧してよい著述は指直の『猿蓑附合注解』（明治二十年刊）である。著者は矢部氏、名は楨藏、俳諧は永機に就いて桃支庵指直と號した。紀伊の人で上京して本郷菊坂町に寓居してゐた。蕉風俳諧の純作品を集成した『猿蓑』の價値は子規が『俳諧三佳書』の一に擧げて、新派俳句の聞に再認識された如く思惟されてゐるが、漫然舊派なる輕侮を受けた宗匠の中から出て『猿蓑』に着目し、よし決して研究的な態度とそれだけの學識はなかつたとしても、指直の啓蒙的な見解は異とせねばならない。新派俳句では鑑賞的に『猿蓑』の境地を絶讃したけれど、それは發句に止つて連句の藝術的な氣分に觸れるまでに至らなかつた。指直は又『猿蓑』の附合卽ち連句には陶醉したが、發句の一々を吟味して制作上に資するまで、いはゞ鑑賞的には何ら發明するところがなかつた。指直のこの著は

今爰に注解せしものは古書のよきは用ひ、あしきは正し、故事の類ひも其附意に疑はしきはこれをとらず。專ら附意の解亮を主とし、打腰より四五句の運び、且一面の見渡しのもやうをも簡短にしるせり。又附方の必用となるべき法をいさゝか取集め、卷尾にかゝげて初學の人の楷梯となすことしかり。

明治二十年五月　　桃支庵指直

といふ開題で、その目標の附合を學ぶものゝ指導にあつたことが知れる。指直が「古書のよきは用ひ」と稱せるは空然の著『猿蓑さがし』を指してゐるので、蔦齋翁が「あの本は猿蓑さがしをすつかり盜んだものです」と輕蔑してゐたが、實際讀んで見ると、全部を剽竊とするのは苛酷であつて「よきを用ひ」た點が多きに過ぎ、「あしきを正し」と稱する個所が乏しい結果空然の說をおそふた如き外觀となつたのである。何丸の『七部大鏡』は見たやうだが、曲齋の『婆心錄』は知らなかつたらしい。その說の『猿蓑さがし』に準據したのは事實であるが、解釋の仕方は指直のいふ通り「附意の解亮を主とし」たもので考證の煩はしさはなく一讀明解であつて、例を『鳶の羽』の卷の二の表「いちどきに二日の物を喰て置、凡兆」の次から引くと

雪氣に寒き島の北風　史邦
前句荒働きをする人と見て、海邊を會釋（あしらひ）て付たり。是逃句の付方也。
火ともしに暮れば登る峰の寺　去來
其場の見出しにて、點燈に登る人の寒さに首をちゞめ行さま言外にありて眼に見るやう也。

ほとゝぎす　皆啼　仕舞たり　・　翁

火ともしにのぼるに、そこらひつそりとしたる趣を付たり。時鳥の啼さうな空なれども、最早時節も夏深くなりたれば、其聲もせぬと嘯くさま也。

連句とはどんなものかを誰にでも解らせるには、決して事缺かない要領のよき說き方である。特に意を用ひたのは一卷の見渡しに就いてゞあるが、

扨二の表に移るあたり二三句の運びちゞみたる附方なれば、此邊二三句の附方延やかにせしは、見渡し變化の扱也。且一句立の云こなし口にたまらざる風調をおの〳〵吟じて知べし。

この附記は頗る親切でたゞ一句の解と附意のみでなく、かういふ全局的の批評は連句の理解には不可缺のものである。附錄の七名八體その他は支考の說を簡明に述べたもので、指直獨自の意見ではないけれど大體に於て誤謬を見ない。此の『猿蓑附合註解』の一書は書史學的に重視すべきものでないが、啓蒙的には初學者を利益したこと尠少でなかつたらう。著者指直は當時の俳壇として確に一個の存在であつた。

明治三大家の春湖と其生涯

春湖翁傳を草した信夫恕軒

そばやの行燈のやうだと冷語はされても、今以て何々庵と號するのが舊派の俳人の常であつて、それも傳系的に誰か古い俳人の庵號でなければ誇稱されないかのやうに思はれてゐる。其庵號を先人に求めて、これを嗣ぐ事を潔しとしなかつた點に於て、明治三大家の位置に擁される氣概とさうして技倆を持つてゐた小築庵春湖は明治十九年二月十一日、享年七十二を以て物故した。春湖に關しては既にしば〳〵挿話的に揭げて來たが、その一生に就いて信夫恕軒の「小築庵春湖翁傳」が簡要を得てゐるので、假名交り文に書直して次に引用しよう。

小築庵春湖翁傳　　東京　信夫粲文則撰

嘗テ粲蛻巖ノ言ヲ聞ク。曰ク、少ク諧人共角嵐雪等ト交リ、指ヲ蕉家ノ諧ニ染ム。蓋シ有韻國雅ノ工、猶象ス可カラザルノ景情有ルゴトシ。而シテ諧ハ乃チ然ラズ。能ク俗ヲ雅ニ

鑄シ、腐ヲ新ニ轉ジ、亦一種ノ風流、奎璧ノ餘彩ト謂フ可キ哉。乃チ知ル、俳歌ノ道亦輕視ス可カラズ矣。小築庵春湖翁ハ甲斐ノ人、名ハ實茂、幼字ハ定太郎、初一笑又岳陰ト號シ、晩ニ春湖ト更ム。橘田氏、幼ニシテ學ヲ好ミ、甲府志村某ニ從ヒ句讀ヲ受ク。又諧歌師嵐外ノ門ニ入リ、其道ヲ講究ス。年二十一江戸ニ來リ、巨谷禾木ヲ師トシ、其業大ニ進ム。遂ニ髮ヲ剪リ道服ヲ着シ、北ハ佐渡ニ之キ、西ハ高野山ニ適キ、東ハ金華松島ニ遊ビ南ハ尾濃加越ノ諸名勝ヲ探ル。沿道俳歌ヲ嗜ム者爭ツテ之ヲ迎フ。而シテ芳野ノ山、月瀬ノ溪、琵琶ノ湖、明石ノ浦、其句中ニ入ラザルハ莫シ。或ハ蕉翁ノ遺蹟ヲ上野ニ訪ヒ、或ハ七部句集ヲ富山ニ講ジ、足跡殆ンド海内ニ遍シ。其京ニ在ルヤ、禾木ノ疫病ヲ聞キ、急ニ還ツテ之ヲ視テ、厚ク葬ツテ而シテ去ル。弘化丁巳考妣ノ忌辰ニ當リ、乃チ馳セテ甲ニ之キ、荒川ノ礫ヲ集メ、手カラ法華經ヲ寫シ、一字一顆、以テ冥福ヲ祈ル。其師親ニ篤キコト此ノ如シ。後深川永代橋側ニト居シ、小築庵ト曰フ。名聲隆起シ、四方來ツテ業ヲ問フ者幾千人、天下春湖翁ノ名ヲ知ラザル莫シ矣。翁圓頂方袍頎然トシテ而シテ長瘦骨鶴ノ如シ。口訥々言フ能ハザル者ニ似テ、一見其庸人ニ非ザルヲ知ル。書太ダ奇古、俳歌古雅幽深凡調ニ異ル。明治十九年二月十一日歿、年七十有二。初翁經ヲ寺門靜軒ニ聽キ、又環溪禪師ニ從ヒ、菩薩戒ヲ受ク。禪師其悟道ヲ嘉シ、麈尾一柄ヲ贈リ、其印可ヲ證ス。余嘗テ之ヲ聞ク。蕉翁ノ病革ルヤ、門人其槖ヲ啓キテ之ヲ視ル。則チ杜詩集註一部有ルノミ矣。是ニ由ツテ之ヲ觀ル、俳歌十七字豈不學不術ニシテ而シテ能ク爲ス可キ者ナラン乎。

春湖の生涯は大體これで盡きてゐる。梁蛻巖は儒者梁田氏で俳號を魑毛と呼び其角に親近したが、起筆に擧げたまでゝ春湖に交渉のないこと云ふに及ばない。春湖の父は京師の公家侍で流寓して甲府横澤町の妙本寺に身を寄せ、長は春湖、次は僧となつて寶海と呼んだのださうで、「甲府志村某ニ從ツテ句讀ヲ受ク」とあるが、事實は武人志村某の僕となつて老父を扶養したのだといふ。俳諧は甲府の御小人組頭であつた水卷通志に學びその手引で嵐外門に入つたのだと『甲斐俳人傳』に見えるこれらの事柄は信じてよからう。併し『峽中俳家列傳』に「岳陰と號して髮を削り道服を着し」とあるに對して「其岳陰と號せるは俳諧の蘊奥を極めし後の事なり」と、恰も春湖晩年の號なるかの如く記してあるが、岳陰は春湖が諸國行脚の修業中に稱したので、春湖と呼ぶ前の諸集には岳陰の號で擧げた句のみである。門人茶竹堂青宜の編した追善集『きつかう集』

明治二十五年刊が殘つてゐる。

蒼山と主僕交代の雲鳥日記

春湖の岳陰時代に就いてその晩年の弟子で、下谷長者町の市村座裏に大夢庵といふ一草庵を結んでゐた千畝老人はこんな話を語つた。

先生が須賀川へ行つて多代女をたづねると「岳陰さんも大層上手になりなすつたね」と、すつかり初心扱ひにされたさうで、後に自分に向つて「ほんとにいま〳〵しい婆アだつたよ」と口惜しがつてゐた。

春湖を有名にした『雪鳥日記』安政三年刊のこともこの千畝老人から聞いたので、

俳諧は春湖より蒼山の方がうまかつたといはれる。その蒼山と二人一日代りの宗匠となつて廻國した紀行が『雲鳥日記』といふので、暢氣な行脚二人の氣まかせな道中記だからなか〳〵面白い。自分はその寫本を持つてゐる。門外不出の本だから貸す譯にいかない。こゝへ來て寫すのなら春にでもなつたら又來さない。――見せるから。

私のノートに「大正七年九月三十日聞く」とあるから今から十四年前のことでそれ以來『雲鳥日記』を見たいと思つてゐたが、翌々九年の一月千畝老人は八十二で歿した事をきいて、千畝の門人の蓮向といふ人にその寫本があつたら遺物の中から買ひ取つてくれるやう頼んでおいたが、その蓮向といふ人も死んで了つた。その後偶然にも『雲鳥日記』の板本を獲て千畝老人の觸れ込みの大きかつたゞけ、內容のそれ程でないので失望した。

書をよむ事百卷ならずして、たゞ風月をあざけるもの二人、冬籠りのつれ〴〵に奥の細道を取出て、うたがはしき處々問も答もするついで、かゝる跋涉もまなびみんとおもふこゝろ起れり。

といふのが其の書起しで、安政二年二月十七日名古屋の松聲庵から發足して「一日はさきに立て主人のごとく、一日は引おくれて僕のごとし。筆は番各にとりてその日の情を轉ぜんとす」とあるのが、千畝老人の「一日代りの宗匠となつて」といふのに符合するけれど、行脚先で必ずしも文豪を立てゝ宗匠をつとめたといふ譯ではない。伊勢の大廟、那智の瀧などを見て、四國では、宗鑑老人の一夜庵は有明濱のほとり興昌寺にあり。小僧の案內おぼつかなく小たかき處に

いたるに、其代のはしらむしはみ殘りてこのもしき柴の戸なり。老人はじめ此寺に梅谷禪師に參じ、この地の風光を愛し跡をとゞめけるよし緣起にも見えたり。

あけやすき軒もたえて一夜庵　春湖

今の一夜庵とさう大して變りがなさゝうである。九州へ行つてたゞ薩摩一國では國境の關所で「國の掟を聞、證文を殘す」とあつて「いかめしき侍來りて旅人いざといふ。兼てきゝつる宰領といふものなるべし」といふ監視附で引廻された上、「同行の腹を病るに、掟なれば一宿の外ゆるさず」どこまでも窮屈なのでそこ〳〵國境を越え、肥後の熊本では、

おなじ府の流長院に越人の墓あり。まゐりてはな水をさゝぐ。元祿十五年身まかり過去帳に佐文利勘左衞門の名をとゞむ。尾張の國の月花に遊び暮し、老の後歸參して家祿を複しゆゑありて露夕とあらためけるよしなり。むかししのぶ草のひとつになん。

恐らく鳳朗あたりの口から、かうした人違ひを尤らしくコヂつけたのであらう。越人傳の汚點をこゝでも拭はれてゐない。越人は享保となつて故人となり、名古屋の大圓寺に「負山子越人叟之墓」とあるのが墳墓の地なので、熊本說は越人の傳系を箔づける鳳朗あたりの拵へたもので、況んや越人の越智氏を佐分利勘左衞門と、緣もゆかりもない人物につくり替えるに至つては妄誕の限りであらねばならぬ。笑の序に懲しておく。とは云へ春湖には罪はないので「むかししのぶ草のひとつになん」と書つけたのは本人として見れば考證家に便したつもりなのであらう。藤摩だけはろくに覗きもされなかつたが、九州は大概の名所舊蹟をめぐり、歸路は山陰に出でゝ一年九ケ月の旅裝を「三河の國牛久保の里にいたり、完伍ぬしの凉石居に風呂舖をとく」とある如くこの『雲鳥日記』の筆を擱いてゐる。

にし東空ふりかへて冬籠　春湖

千畝老人の話に引ずられて『雲鳥日記』の紹介が小し長過ぎたやうでもある。

蒼虬の後塵を浴びない風格

信夫恕軒の春湖翁傳もこれに附錄されてゐるのだが、『春湖發句集』明治二十五年刊は一代の吟詠を輯めたものとしては慊焉たるところを免れない。が、明治三大家なるものゝ風調は大概似たもので、爲山に梅室の俳を存するとすれば、春湖には蒼虬と一脈の通ずるものがあり、等栽はそのどちら

に付かず、と云つて兩者から蟬脱しきれないので、作家として春湖が最も技倆を有せるかに思はれる。

草庵

潮來れば橋のこなたも春の海

大溪山に宿して環溪禪師に呈し奉る

米搗に慧能居るべき茂りかな

秋葉社頭

空や杉や立かはりても神の秋

節分

身のうちの鬼もおどろけ年の豆

作者の境地及び主觀の投影せるものは多く前書附の句に窺はれるが、草庵の句は深川永代橋に近く小築庵を構へてゐたのだから、朝暮の叙景として「春の海」の季語で現前にその景致が見られる。環溪禪師は春湖の著『古池眞傳』の着語で知らるゝ永平寺の今なら管長であつた。慧能を拉して禪的境地を脈味なく表現し、其角の『五元集』にでもありさうな句である。秋葉は遠州のそれで向嶋のではない。「空や杉や」と「や」をたゝんで置いたので印象的な句となつてゐる。節分の句は想は月並を免れないが、梅翁の「おどろけや念佛衆生節季候」のその「おどろけ」を、「身のうちの鬼も」に持つてきたのだと察しられる技巧に月並的の臭味を脱してゐる。題詠と見らるゝ句にも點取調のものは流石に尠い。

なの花に入らんとするやはしり波

面箱も芝のしめりや薪能

夜座獨吟

ぬけ落る瓦のおとや五月雨

白はえや夜すがら燒し鹽のうへ

はつ秋や草扱ひし緣のぬれ

茶けぶりをあふぎ返すや桐一葉

山茶花や水屋の水に影のさす

雪の日や鳥の子紙の薄ぐもり

菜の花のはしり波は瀲灩として汀に溢れ、餘波のはしつて菜畑を浸さんとする一幅の寫生畫である。薪能に面箱の趣向は思ひつきで「芝のしめりや」で調和を得てゐる。五月雨の瓦も「ぬけ落る」で雨勢の激しさ雨量の多さを想はせる。白菜の鹽竈は取合せよく「夜すがら」でその朝景色なることを彷彿させてをり、初秋の氣分を緣の濡れによせて「草扱ひし」は氣が利いてゐる。茶けぶりの桐一葉、山茶花の水屋は配合が巧みで、殊に「水屋の水に」と同語を重ねて二重の效果を收めてゐる。雪の日の鳥の子紙はなんらの交渉もないものでありながら座五の「薄ぐもり」で、適切に雪の日のしめり持つ空氣を描いてゐる。蒼虬に擬せらるゝ春湖のスケツチ的な手法は蒼虬の持合せないもので、春湖がわれ〳〵をして其句に好意を寄せさせるのも、厭味な小主觀に墮せずして客觀的に表現してゐるものゝ、やゝ目につく程散見するからである。春湖が臨終の日、その主治醫で俳諧の門人である愛石に向ひ、

俗談平話　七十二年
風流着々　虛空喫轉

梅柳あとに寢かへるばかりなり

この喝とさうして辭世も、禪的に決して似而非者とは評されないであらう。愛石が感動して山岡鐵舟にこの喝と句との揮毫を乞ひ、春湖の遺子仲太郎に與へたといふ『春湖發句集』の序文を讀んで、七十二年の俳諧生活を顧み、明治三大家の名を恥しめない彼の一代を弔ひたい。春湖の同庵かめ女も發句をよくし

たきものゝけぶり匂ふや朝霞　かめ女

平懷な句だが亡夫の追善に詠んでをり、女流の門人には採花女があつて明治舊俳壇に存在をみとめられた事は更に紹介する時があらう。

戀が窪の農夫から出た可尊

春湖に師事した千畝老人を崇敬した曉夢庵蓮向といふ人は牛込の足袋屋であつた。私はこの人に聞いた話で戀が窪の寶雪庵可尊の事をはつきり記憶してゐる。戀が窪は櫻の名所小金井在の農村である。

可尊は若い頃、肥汲みのため月に幾度も江戸へ來たさうでした。牛込赤城神社の境内に寶雪庵嵐山といふ宗匠が住んでゐて、可尊は肥を汲みに山の手に來ると必ず立寄つて、俳諧の話を聞いて行つたさうです。肥車は往來へ置き放しで何時間でも歸るのを忘れる程でしたと云ひます。あまり熱心なので嵐山が或日「お前、どうだね。百姓をやめて俳諧師になる氣はないか」と尋ねると、可尊は望むところで一本立の俳諧師になる道を聞き返しましたので、「お前がほんとにその氣なら、俺にはあとつぎがないから養子になつてくれまいか。俺の知つてることは何でも傳授してやる」といふ事で、遂に可尊は嵐山の許に夫婦養子となつたと云ふのです。大夢庵はこの可尊に最初教つたので、千畝の號もその時つけて貰つたのださうです。

蓮向老の話の大體はこんな事であつた。寶雪庵可尊の名はそれから私の忘れない記憶となつたが可尊の著『故郷のいしぶみ』明治十二年刊を接手してその人物を明瞭に知り得たのである。戀が窪は「鎌倉幕府のころは東海道大磯の花街と一二をあらそふ斗の繁榮にて」そこに遊女のたむろした中で秩父の庄司重忠の妻妓があつたが、「もの妬するをのこありて重忠は西國のたゝかひに身をはかなくしたりと僞り告しに、かの遊女あざむかれて悲歎にせまり、ついに自害してうせにけるを重忠歸陣ののち、おもひあはれみて墓じるしに松を植させ、後のわざどもねんごろに弔ひものしける」より、戀がくぼの傾城の松とて長く久しくその名の殘れる」を遂にその松も枯れて、人の知るものなきに至つたのを慨して、明治四年可尊が發企し同七年の秋に至り、道興準后の詠歌を有栖川一品幟仁親王の御染筆を願ひ、

朽はてぬ名のみ殘れる戀が窪　聖護院道興
今はたとふもちぎりならずや

右の碑を建立し『古郷のいしぶみ』を著した譯であつて、その序に「東武蕉門寶雪庵六世のあるじ可尊」と署名してゐる。戀が窪のことは『江戸名國圖會』に載つてをり、可尊が最初に埋れたる名を起したのではないが、その碑に添へて

ひよろ〳〵となほ露けしやをみなへし　芭蕉靈神

これを副碑として一集を企て、諸國翁塚の一としたのは可尊の俳人的努力の現はれであつたと云ひ得よう。『故郷のいしぶみ』には詩人大沼沈山の叙があり、纔が窪とあはせて附近の名所古蹟に就いて古今俳人の吟を錄し青梅の名刹金剛寺の事も出てゐる。

青　梅　町

眞言宗金剛寺庭中梅、四時青くして落る事なし。仍て土地の名とすといへり。名産青梅縞を出す。

ある日好々居に遊びて

青梅の落も盡さず初しぐれ　可尊

機音さそふさとの十月　臼左

ふり茶好釜の湯不斷泌らせて　同

人さへ來ると嬉しがらるゝ　尊

既望もそちこちする閑景色ばみ　同

堅田のかたへおろす鴈かね　左

寺傳によると將門が鞭に持つてゐた梅の一枝を土に挿したのが、その青梅となつたのださうで現に好々居の句碑が後背に殘つてゐると云ふ風で、可尊が曳杖した名所に關する諸家の發句及び附合を挿入してある。可尊が『古郷のいしぶみ』を板行する前年「すでに七十九といふ齡になりぬしとあるから、明治十九年九月十二日その歿した時は享年八十八であつた。可尊は『寶雪庵月並』を摺つて、太白堂孤月と爭ふ勢力があつたと云ふが、その句には孤月程の特徴を持つてゐない。

鈴　か　森

題目をめぐる雨夜の螢かな　蒲田女夫橋

若草の妻はいづれぞ女夫橋　羽根田

鳴たつやよしはら雀葭雀

鹿の湯

荻くゞり〳〵鹿の湯流れけり

飛鳥山

夕陰や松風さむく名の木ちる

概して體屈の來さない句と云つてもこの程度で、題詠趣味を一歩も出でなかつたのは、その人物の變つてゐるらしく思はれる期待にそむくものと評さねばならない。可尊の姓は判然しないが『古郷のいしぶみ』によると坂本氏であるらしい。

モダーン乙彦と才媛久良女

秋巖の賀莚及び乙彦の落魄

傾斜の女性を中心として社交が結ばれた頃と云つても遠い時代でない。宴會の大小で主催者の世間的人氣の反映を見られたそも〳〵の明治五年四月廿一日、江東中村樓で開いた『秋巖賀莚名簿』明治五年刊によつて、書家秋巖の盛名と交際をトしわれ〳〵はたゞ驚く外はない。豪商の三井からは高福、蘭學者の盤溪、詩人の枕山、三洲、畫家の是眞、芳幾、好事家の月岑、只誠、戯作者の魯文といふ風に新舊の社交人、及び劇壇の勘彌、角界の治右衛門、その上に俠客の相政に至る三百人を突破するお客に對して、杯盤を斡旋するに新柳の歌妓、吉原の金瓶大黒の今紫なんど、それに菊五郎、芝翫の人氣役者が幇閒と同座し、當時の宴會では一二を爭ふものと評判されたであらう。その秋巖の養子で宴會を切廻したのが『俳諧新聞誌』の乙彦であつた。乙彦が『賀莚名簿』の跋に宴を取持つた優人、妓女百五十人の名を附錄した件に就き、

鄙語ニ曰ク、野夫ト頑兒トハ函峯ヨリ以東ニ在ラズ。況ンヤ方今王畿千里ノ地、何ゾ溝瀆ヲ擇ン。花娘ヲ嫌ヒ、戯子ヲ忌ム者ハ、所謂窮閉ニシテ聞名、開花ノ人ニ非ザル耳ナランヤ。

と漢文で四角張つて、然も嘲弄的に舊弊、文明、開化に窮閉、聞名、開花の字を充てゝ野暮な非難の起らぬ前に辯解してゐるが、こゝに秋巖の賀莚を引合ひに出したのは、爲山や等栽の俳諧師が悉くその宴に列してゐるからではなく、乙彦の境涯の變化を觀察する第一前提としてゞある。一座の名花と眺められた金瓶大黒の今紫は遂に秋巖が落籍したさうであるから、乙彦には第二の母になるのだが、明治十年秋巖が歿すると乙彦は今紫と同棲したさうで、通人大久保紫香はそれを怒つて絶交した話を琳琅閣の主人で乙彦の門に出入した齋藤氏に聞いた。乙彦が歌澤能六齋の藝名で、今に唄はれる艶冶な歌詞を作つたこと、戯作には二世梅暮里谷峨と名乘つたことは三田村鳶魚氏が傳へたので玆には省く。モダーン俳人としての乙彦は『俳諧新聞誌』や『俳諧手洋燈』に關聯して述べたが、森氏、秋巖の家をついでから萩原氏となり、通稱は語一郎で、俳諧は道彦系統の者に隨ひ、鳶の本、十時庵、蕉華庵の號があり、後に爲山を慕つてその門に入り、早くは江戸橋場の石濱に、東京となつて下谷二長町に住み、その居を對梅宇又は二酉精舍と呼んだのであつた。今紫の件から東京落ちをして最初は靜岡新聞社長に招聘されたが、それも勤まらずして甲斐國谷村へだん〳〵に落魄的の貧居に安んじなければならなかつたのを、不倫な生活の祟だとして彼を知る者の間に取沙汰されてゐる。從つて歿したのは流寓中の谷村で明治十九年二月二十八日、享年六十一であつた。乙彦は「俳諧藏印譜」に掲げた八卦の爻文を象つた彼の挿架印が、現に稀觀の古俳書に見られる有名な藏書家で、明治の古俳書蒐集は乙彦から雀志、それから洒竹に感染したのである。乙彦の藏書は茶箱に何杯か詰めて東京へ持出され、定めし散佚したことゝ思はれるが、私もその若干をずつと後に購入して所持するので、大抵はどこかの文庫に收つてゐる筈だ。

乙彦はモダーン俳人とは云へ、學識の氣隙にぶら下がる通人趣味の方へ偏した點もあつて、モダーンならそれもよく、通人ならそれもよいから、開化的な或は粹人的の新東京座風に進んだら、あゝまで落魄しなかつたらうに、

香ばしりて烟るばかりや朝の梅　乙彦

蔭ふかき柳をよそに納涼かな

動いては夕暮にする薄かな
上汐に逆らふ聲やよるのをぎ
盜まれぬ鶴の鳴くなり冬の梅

その俳句の佳なるもので、かう云つた正風といふ傳統をはなれないものなので、彼の數奇な運命のやうには俳人的存在を認識されないのである。

墓場で轉んだのが死の前兆

雪門では宗家と呼んで傳系者を勿體振らせるのが蓼太からの對門人策であつた。八世の梅年は足袋屋の職人で、聲望充分とは云へないけれど、永機を傍杖にしてその補助で宗家の格式を支持してゐた。尤も梅年は永機の技倆に心服して伜の吏中を弟子入れさせ。明治十九年永機の後見で吏中を雪蓑人宜來と改めた上で立机、雪門一列の判者に加へたのであつた。是は永機が「やがて九世雪中をも嗣せばやと柾のかつら永き末をたのしみ侍るに」と梅年の意中を忖度して述べたやうに、雪門の宗家を伜の讓りものとしたい肚があつての事だつたに違ひない。宜來は「筆とる事にたけて既に去年の秋、隅田川の菊塢が梅園なる老師が雪の人の碑に其あとを殘せり」と一門雀志の記せるごとく、今の百花園にある、

たそがれやひとり行雪の人　梅年

の句碑をしたゝめた程だが、明治十九年一月十三日、享年三十で歿したので、突然の訃に接したからであらうか、宜來に關して噂されたその一つ「あれは根津の女郎と心中したつて云ふのが本當ださうです」と蔦齋翁の話を先年十一世雪中庵を引退した清水東枝氏に傳へると、「梅年さんの伜で變死したのは宜來の弟で踏臺から轉げて撲どころが惡くて絶命したのですが、心中なんてそれは嘘です」と否定して、

さう云へば宜來さんにはよくない緣起話がありました。雀志さんと宜來さんとそれに私、まだ誰かゐた筈ですが、本所一ッ目のある寺へ古い墓探しに行つた事がありました。どうした拍子でせうか、宜來さんはけつまづいでお墓の中で轉んだ譯なんです。すると「お墓で倒れるからはお迎へが來るかも知れないね。今から辭世でも拵へておくことさ」と何氣もない揶揄ひ言葉が前兆で、間もなく若くて故人となつたのです。

と、東枝氏が鶯谷の割烹店伊香保の主人であつた頃、私にかう語つたのが事實であらう。

宜來身まかりてより只うつ〳〵として、眼に姿の見ゆるばかり夢か現歟。

この寒さいつかわすると日やあらむ　梅年

父として宗家として人情さうもあらう。永機も「老たる親に先だち、七夜に足らぬみどり子を殘せしは、嵐蘭が終焉にも百倍すべし」と悼んで、

春風に折れぬものかは桑の杖　永機

この句を手向けなどしたのを雀志が宜來の追善集『初花集』明治十九年刊に取纒めて板に起した。その中に「宜來遺稿四時」と題した俳句に、

寶晋齋の硯、ふたゝび其角堂へもどりしと聞て

梅が香も添ふ御祕藏の硯かな　宜來

ゆふがほの花にくらべん單物

わすれずやいつもの木より初もみぢ

小机のとり廻しよき小春哉

三十年の夢はけふ覺るといへども、親に先立の不幸いかにせむ。

解る日の來て是非もなきこほりかな

永機が其角堂の什物に寶晋齋の銘ある硯を獲たのはこの頃の事らしく、「御祕藏に墨をすらせて梅見かな、其角」の句意をふんでの作といひ、孰れも雪門調と呼ばれるもので永機の口吻には似るべくもないが、辭世で見ると病死に疑ひないらしい。連句は

いろどりに檀こぼるゝあられ哉　永機

冬のけしきのはまる栞戸　宜來

解船に鐵槌いれる汐の干て　梅年

腰かけながら湯漬かつこむ　機

月明り露のあかりと明うつり　來

田は飛〳〵に刈かけてある　年

永機自筆を刻した『初花集』の三吟で一通りは誰にも附劣らない修練をしてゐた事は解る。

モダーン乙彦と才媛久良女

父子二代の花墻漣々と誤傳

花墻漣々は父子その號が同一で『俳諧人名譜』は父子を綯交ぜて一人の號をつくり、それに據つた『新選俳諧年表』に誤謬を再び襲つてゐるが、『白雄夜話』天保四年刊を板行したのは父の漣々で、御三郷の清水家に仕へ衞士小隊長を勤め、安政五年七月、享年六十一で歿したのである。その子で芙蓉庵富水と號したのが、翌年の小祥忌に

子として考の號を嗣がざらんも、不孝の一端ならんと同門のすゝめもだしがたければ、小祥忌いとなむ次に其事をも、人々につげんとかくは申出ぬ。

富水改二世花垣漣々

常盤木にまじる實生の紅葉哉

この詞書を添へて家父の『漣々發句集』安政六年刊に發表してゐる。父子相ともに大久保氏、父の諱は忠善、子の諱は忠保、通稱は同じく伊三郎であつた。成美や道彦の莫逆であつた去來庵宗讃の二世雪明の門から、藤垣爐扇の庵中に轉じて花墻の號を許されたのは父の方である。『漣々發句集』は龍尾園活字板と奥附にあり、近代木活本の俳書では嚆矢と云へないまでも、『俳家新聞』慶應四年刊より十年も早く活字刷りであるのが珍である。さて二世の漣々は維新後、內藤新宿から牛込東五軒町に轉庵して疊山居、又、干茅老人と號したが、芙蓉庵富水の前號は門人西谷氏に讓つたと見えて、富水はその著『俳諧作例集』に芙蓉庵を號し、且、師漣々の跋を錄してゐる。曰く、

人生れてあ、といふ、い、う、え、お、したがつてとなふ。少年にいたりて俗にまじはり俗に化せられて、その正しきを失ふに似たり。たま〳〵歌よみ句を吟ずるにも其てにをはに合はざるをもて、つひに語學てふひとつのまなびはいできにけり。こゝに芙蓉庵主人は此道に志深く、練磨すること年あり。かれそのまゝ語格にたがへるをうれひて、歌をもて證とし發句のてにをはにかなへるを抄出して、俳諧作例集と題しかたはら今人の句を加へて、その正しきにかへらむことをこひねごふ。予もまた老婆心に一言を贊するのみ。

明治十二年九月下浣　　花墻漣々しるす　花墻　漣々

この跋に假名違ひのあるのは語格の本だけに不愉快だが、それを咎めるのは漣々、延ては國語的啓蒙期にあつたその頃の學者に同情なき仕業とならう。二世漣々の歿年は明治十九年三月五日享年五十一なることに相違ない。花墻の系統と門人の二三を附記すると左の如くである。

一世 花墻 蓮々 大久保氏
- 二世（初、芙蓉富水）二世 花墻 蓮々 芙蓉庵富水 西谷氏
- 清土園庸齋
- 瀧水舍楳仙
- 梅扉菱齋

一世蓮々の發句は刊本と別に『華墻家集二編』（安政三年編）を所持するが、二世の句集はその有無を知らないけれど、『作例集』に引證の句は語格に叶つたものを基準としてゐるので、

鱸拍子も眠たし月ぞ朧なる

此中に藥もふるか雨のあと

削りては花とこそ見め夏氷

心あらば月やめづるとはれよ月

股引を脱てをこえん露の原

圏點を施した係結び、及び切字をしらべるには役立つだらうが俳句の價値にはこれだけでは觸れられない。

老懐

しかられに起て火を焚夜長哉　蓮々居士

入にし月の暮はしき影　二世蓮々

冷やかに露を飜さぬ艸もなし　對水

硯の墨のほの匂ふなり　風光

夫となく來合す人を茶の相手　世外

椽の雀のはら〳〵と立つ　庸齋

此脇起し歌仙は二世蓮々の捌きに成ると思ふが、恭でいはゞ定石を守るのみで、連句的變化が見られないので、その作風はこれを以ては評されないけれど、家集に接して再吟味をしたところで、父の蓮々を凌駕する力量を發見する期待は斷じて掛けられない。

才媛久良女の夭折と其句集

人間には趣味性が内在するので誰かその家系に一人、俳諧を嗜む者のあれば、閒歇的遺傳とし

て俳諧に關心を持つものゝ、再現することは常に見らるゝ現象である。此『久良女發句集』明治二十一年刊の作者村山久良女は越後國刈羽郡岡野町の四時庵抱月を父として、あまつさへ祖父龜石は地方的に知られた俳人だつたので、閑歌的どころでない三代相傳の俳諧的血脈を承けたのであるから、養志軒桑古が其句集の跋に祖父龜石が久良女の「いとけなき比よりも膝下にかしづけ、みづから好めるをもて俳諧と茶とを教ふ」と云へるやうに、たゞ孫女の生立を慈しむばかりでない。女性の教養として嚴に躾けたのだから、天性の怜悧さは「一を聞いて萬を知る」才女の俤あつて、龜石の許に奉納又は法樂の發句の催しあつて評を乞ふものあれば、久良女に代評させると「叟（龜石）が思へる所處にいさゝかも違ふ事なし」といふ風であつた。久良女が「十六歳の夏、名古屋の羽洲園の門に入しむ」とあるは明治五年の事と思ふが、羽洲の序文には「過にし年己が門に入て、青藍のきこへ有しが」とあるだけで、實際名古屋まで行つて羽洲の直指を承けたのか、それとも桑古の跋に「干レ時連句數卷、大木を倒し鍔元に切入のをしへを得て」とあるのは、文通上のことだかも知れない。

父母のゆるしをうけて、東京に杖を曳んとする其うれしさ限なければ

散る雪を花とはらふや旅衣　くら女

彼女の口から喜びの溢るゝこの上京は、「東京に遊び小築庵に隨心して」春湖の紹介で、俳壇に知らるゝ目的あつてのことであらう。

春湖老師の昇進を祝し侍りて

深川のながめ戀しや冬籠　くら女

これは國に戻つてから春湖が神道の大講義にでも補せられたのを祝ひ、在京の日の淺かつたのを回想した句であるらしい。東京から十九の歳家に歸つて「明るとし分家某に嫁すといへども、風雅の事は許しを得て、家産のまに〳〵又予に隨ひ」と云ふ予は筆者桑古の事だから三度び師を替へ、桑古には「祖翁の句解、七部集の講義には晝夜を分たず、寢食を忘れて」その教旨に徹せんとしたのであるが、明治廿一年一月病歿して、若き二十三才の主婦としてよりは、天才的の女流俳人としての最期を惜まれたのであつた。

くら女のよみ捨てし句ども集むると聞て、人の需に應ず、

おしまるゝ世をふり捨て散さくら　海舟

勝海舟の題句が彼女の句集をして光彩あらしめてゐるが、久良女の俳句は果して文學的に評價されるに足りるであらうか。

若水や男に眞似ていざくまん
すゞしやと寄集るもすゞみかな
しら萩や見はやすうちに月も添ふ

都の人に答ふ

冬籠さながら隙もなく過ぬ

女性の本心は主觀的な感じ、それも淺い、思ひつきに表現されるので、千代尼をして再生せしめても此の程度を出でないだらうから、千代尼にすれば彼女の二十三の時は伊勢の乙由門に入つた句作の一階梯に過ぎないので、久良女の俳才をこれらの句で苛酷に評されるであらう。

日表や雲をかぶさる朝ざくら
山かげやほたるに見ゆる人の顔
仰向て冷たさしりぬ天の川

ある峠にて

あとさきや時雨るゝ雲を見て歩く

素描的な叙景は千代尼の敢て詠む事を望まなかつたところだが、久良女には客觀的にそれは簡素な叙し方ではあるが、技巧的になり勝の感情を抑止して自然觀照の境地にまで入つた點を見逃せない。明治蕉派の俳壇には浪兮女は前代の分水嶺上にあるので措いて、採花女を唯一の女流俳人とするに止まるので、久良女の存在はその句集の殘された點から見ても記錄してよからうと思ふ。因に『久良女發句集』の編者は後に南無庵と號した讃岐の翌浦堂眞海である。久良女の同姓の村山氏なので一族の人かも知れない。

明治萬題集に就いて

私は主要な俳書はその出版年次を參照して解說をして來たが『俳諧年表』の類に明治十八年刊行の『明治萬題集』を擧げてあるにも拘はらず、同書に一切筆を觸れなかつたので、或はその書を見ないのでないかと疑問を持たれる人もあらうから一言する。『俳諧明治萬題集』小本四冊は故

月之本爲山輯、夜雪庵金羅增補、明治十八年二月十日の出版屆があつて、書肆青雲堂から定價五十錢で發賣されたのであるが、金羅の序に

此集はこと葉の花の香くはしく編者の名の梅廼本に逍遙する心地す。はじめ櫻木にのぼせしは天保うしの年にしあれば其因によりて、今の世迄長く行はるゝも爲山翁の德の餘りといふべし。されば明治の御代に至り、此も改り更にかゝぐべき題も尠からずとて、青雲堂のあるじの乞により聊刪增せしも、猶今人五百題の號を存せしは、翁の意を空しうせざると、將、大は小をかね、おほきは少を補ふに足ればなり。

明治十八年四月　夜雪庵金羅

とある通り爲山の編集した『今人五百題三編』（嘉永五年刊）の板木の殘存せるものを埋木して、金羅がその題號を襲ふたよしを斷つてゐるものを書肆が濫りに『俳諧明治萬題集』と改題し、增補とは云ふものゝ金羅の發句を添へたゞけの事であるから、私はこれを引證しなかつた譯である。

昭和九年十二月十五日印刷・昭和九年十二月廿日發行

明治俳諧史話　著　夜雪庵金羅

定價　二圓八十錢

發行者　東京市京橋區八丁堀二ノ一一　櫻井益次郎
印刷者　東京市神田區代土美町一ノ二一　篠田玉三

大誠堂
東京・京橋・八丁堀
振替東京八五〇四六番
電話京橋三二五番

◇燦たり大芭蕉の金字塔◇

大芭蕉全集 全十卷

監輯 勝峯晋風 河東碧梧桐 荻原井泉水 頴原退藏

一流大家擧つて賛助絶讃！

1 俳句篇上
2 俳句篇下
3 連句篇上
4 連句篇中
5 連句篇下
6 俳文篇
7 紀行篇
8 書簡篇
9 俳論篇
10 言行篇

別冊芭蕉傳

◇文は華なり備へよ全集◇

昭和十年二月第一回配本・逐次毎月一冊刊行
四六判九ポ・各篇四百五十頁・一冊二圓
全十卷一時拂十九圓送料共
内容見本進呈

大芭蕉全集刊行會

東京・京橋・八丁堀二丁目・大誠堂

淺